

教育実践力のある教員養成カリキュラムの 構築に関する研究

—教員の職能発達の質的分析から—

山下 真弓

(学校教育)

760-8522 高松市幸町1-1 香川大学教育学部

A Study on Curriculum Design for Training Teachers with Practical Teaching Skills : A Qualitative Analysis of the Way Teachers Develop their Ability to Teach

Mayumi Yamashita

Faculty of Education, Kagawa University, 1-1 Saiwai-cho, Takamatsu 760-8522

要 旨 教員は、自身の力量形成をしていくために、自らの実践を省察することが鍵となる。中でも教育実践力のある教員の省察を、当事者に聞き取ることにより、職能発達を解明していく「ライフヒストリー分析」は、実践力のある教員の養成カリキュラムの構築に資する。本稿は、教員Aから、自己課題と教職への使命感をもち続け、子どもたちの教育に携わる教職の魅力を確認し、「学び続ける教員」としての在り方の事例としての示唆を得た。

キーワード 語りと聞き取り ライフヒストリー分析 省察 職能発達 学び続ける教員

1 はじめに

本研究の目的は、教える側、すなわち、教員の「カリキュラム経験」を読み解き、本学部の理念・目標として掲げられる「教育実践力を有する学校教員及び広く教育界で活用できる人材を養成する」カリキュラムの構築に関わる基礎的知見を得るとともに、同知見を活用した教育実践力を有する教員養成カリキュラムの構築を図ることである。この研究は、伊藤裕康教授と共同研究を目指している。今回は、筆者の個人研究領域に関わる教員の「ライフヒストリー分析」を活用して報告する。

「ライフヒストリー分析」の意義は、教員が自らの教職人生について「語る」ことと、その語られた「ストーリー」を読み解くことで、教員の発達、つまり、教員自身の職能発達の実相をリアルにすることである。山崎準二(2002)は、この意義を、ネルソン(Nelson, M. H 1993)の言葉を引用して明らかにしている。¹⁾

「語りの理論は、人間が本来的に語り手であることを示唆しており、語りの研究は、人間はどのように自らの人生を体験し創造してきたのかということを明らかにするものである。語られたものは、語り手のコミュニティや認知にまで接近する可能性を有している。

もし語られたものがモデルの表明であるとするならば、教授活動についてのストーリーは語り手もっている教授活動のモデルを明らかにする。」

さて、2012（平成24）年8月に出された中央教育審議会答申では、「これからの社会で求められる人材像を踏まえた教育の展開、学校現場の諸課題への対応を図るためには、社会からの尊敬・信頼を受ける教員、思考力・判断力・表現力等を育成する実践的指導力を有する教員、困難な課題に同僚と協働し、地域と連携して対応する教員が必要である。」として、「教職生活の全体を通じた教員の資質能力の総合的な向上方策について」答申²⁾を出した。その中で、これからの教員に求められる資質能力を、①教職に対する責任感、探究力、教職生活全体を通じて自主的に学び続ける力、②専門職としての高度な知識・技能、③総合的人間力、と3つに整理して、「学び続ける教員像」の確立が必要であると説いた。

筆者は、教員は、「学び続ける教員」で在り続けることで、その職能発達をなすと考える。「学び続ける教員」で在り続けるためには、上述の3つの資質能力を教員自らが意識することが重要である。そのために、教育実践力があると思われる教員の発達とその過程を省察することは、さらなる在るべき方向を見定めることも可能とする考える。

そこで、今回は、教員Aのライフヒストリー分析によって考察したことを報告する。

2 教員Aの職能発達の質的分析の実際

(1) 調査の方法

ライフヒストリー分析の成否は、調査者と調査対象者のラポールが大いに影響する（谷富夫1996）。筆者と教員Aは、小学校の外国語活動の本格的導入に向けた平成20年度に、文部科学省から開催通達があった、小学校外国語活動中核教員研修会³⁾を実施した頃より、指導的立場として共に関わることで互いを知るようになった。本稿のための直接インタビューは、平成24

年2月、3月、12月に複数回、勤務校に訪問したり、筆者の研究室で面接したりして10時間ほど対面して、半構造化インタビューと対話的インタビューで行った。生まれてから現在までの教員生活に関する項目、特に教員となって外国語活動と英語教育の実践研究に関することを中心に語ってもらった。許可を得て、録画も行った。電話や電子メールによる補足調査や研究発表会での研究授業の視察も行った。文書資料としては、教員Aが研究の中心として執筆した研究紀要やカリキュラム計画や指導案等を活用した。

教員としての能力の発達を、教職の観点から時期区分によって分析的に見ていく。途中、実際に使われた言葉を記録したものの中に見いだされる傾向を見つけ出していく談話分析を導入する。特に、可能な限り自然な言葉のやりとりから忠実に再現する会話分析を用いる。

なお、このライフヒストリー分析の作成は、教員Aの確認と了解を得た上で実施している。インタビュー記録や資料の使用も、教員Aに許可を得ている。

(2) 教員Aのライフヒストリーの実際

教員Aは、1957（昭和32）年に生まれ、1980（昭和55）年に国立大学教育学部英語英文学科を卒業している。教員免許状は、小中取得しているが、瀬戸内海にある島のN町立の小学校に赴任した。

教員Aが赴任してから6年後の1988（昭和63）年に、N町は町長の「100年先を見る」という考えのもと、近隣の自治体に先がけ、町独自にALT（外国語指導助手）を雇用配置することになった。それを受け、高学年を中心に英語活動を推進し始めることになる。その後、1995（平成6）年にN小学校は小学校における英語教育の文部省指定研究開発学校となり、研究主任となった。このように研究開発学校と指定された学校は、全国で8校のみであった。その後、1998（平成9）年には隣接するN中学校に転勤し、英語科の教員となる。そこでは、文部科学省指定研究開発学校として、一部5・4

制を取り入れた研究や福武研究財団幼小中の英語教育連携などについての研究をし続けた。

2008（平成20）年には、また、N小学校に異動した。合計すると、N小学校に17年、N中学校を11年務め、教職歴31年となる。英語教育についてはもちろんのこと、結婚して島民になり、家族も増え、この島での経験は豊富である。昨年度は、文部科学省の優秀教員表彰を受賞された。現在は、文部科学省から、唯一、高校までを見通した研究開発を託されたN小学校の教務主任として実践研究を進めている。

教職に就いてから現在までを、次のように7期に分けてその職能発達を見ていくことにする。

第1期	教員になるまで（1957～1980）
第2期	学級経営に取り組む（1980～1992）
第3期	小学校英語活動実践研究（1994～1996）
第4期	中学校英語科実践研究（1997～2001）
第5期	小中連携英語教育（2002～2007）
第6期	教員研修の充実（2008～2010）
第7期	教科化の研究（2011～2013）

① 第1期 教員になるまで（1957～1980）

教員Aは、1957（昭和32）年、K県T市に生まれる。両親は、小学校教員である。父親から、心を広く、人として教養をもつことの大切さを教えられたということであった。しかし、本人は両親からの大きな影響は感じていない。

山下：教師になるきっかけを話していただけますか。

A：教員だけにはならないでおこうと思っていました。何がというのではなく、別の世界があるんじゃないかと思ったんですね。教員は分かる、なんとなく分かる。でも、違う世界がある、というそんな感じだったと思う。

教育学部英語英文学科に入学したことが、教員への道としてのスタートであったが、本人はそこまで意識をしていなかった。大学時代は、社会勉強に重きを置き、中学校からしていた卓

球にのめり込んでいた。卒業論文のテーマを尋ねると「早期英語教育」であった。筆者は、取材中に先見の明があったことを讃えた。

A：実は、私の卒論のテーマは、「早期英語教育」なのです。F先生に卒業したら、「続けてくださいね」と言われたのですが、もうないだろうと思っていました。

山下：ほんとうにつながっていますね。どうして、それを選んだのですか。当時、先進校の取組とかを知っていたのですか。

A：マスコミにも特になかったし、大学生だから、そのようなことを考えなかった。文学よりはおもしろそうだと思ったんですね。書籍を読んだり、附属高松小学校で文字を提示して教育していくのと、音声で指導していくのとどちらが定着するのかというのを比べて研究する実験をさせてもらったりしました。今、私たちがやろうとしている研究ですけど、それをやっていました。データを何時間か取るというのをしていました。放課後に子どもたちが残って協力してくれました。

山下：どの先生に協力いただいたのですか。

A：H先生でした。

山下：H先生ですよね。私の教育実習の指導教官ですし、道徳の授業のご指導を細やかにいただいた先生です。授業研究に熱心で、授業をビデオで撮り分析することを学ばせていただいた先生でした。

A：母親が道徳部会にいて、研究授業をした後だったので、その関係から、H先生も引き受けてくださったのだと思います。大学生が来て授業をするのはたいへんなのによくさせていただきました。

山下：H先生は、私の教育実習中の担任です。創造的に研究することを学びました。実習中に道徳の教材にびったりあてはまるものを探してもってくるように言われたり、公園と同じ模型を作ってくるように言われたりしました。ビデオカメラで撮った授業を数分おきに停止し、徹底的な授業研究をすることを教えていただきました。

【考察】

偶然のようで、必然の出会いとはこういうことであろうか。卒業論文研究は、現在の教員Aの教師力の基礎を育んだと言っても過言ではないであろう。

また、子どもと教員との関係と同じで、出会う指導者の影響は大きく受ける。H先生との出会いは、筆者も体感しているが、教員としてスタートする者にとって幸運であった。教員は研究を重視することを教えてくれる指導者に出会うことによって、今後の教員生活に違いが出てくる。

② 第2期 学級経営に取り組む（1980～1992）

大学を卒業した教員Aは、1980（昭和55）年、地元を離れ、現在の勤務校N小学校に勤務する。当時、児童数は590人を超え、教員は、4人着任した。27、28歳くらいの若い教員が多く、一緒に赴任した教員たちとは、勤務時間外でも家族のように仲よく交流していた。このことが教員としてやっていく意志を固めた。教員Aは次のように語っている。

A：本当に、学校がよかったです。毎日がとても楽しく、教員を続けようと思ったのです。みんな、寮なので、行き帰りも一緒だし、帰ったら、みんないて、熱く語り、学生時代の延長みたいな…。

山下：では、この出会いが、教員になる第一の転機だったのですか。

A：教員をやっていると意外とおもしろいじゃん！というようになり、教員を続けるようになったということですね。新採でなかなかうまくいかないこともあったけれど、みんなに支えてもらったというか、教員間の雰囲気スタートとしては大事であると思いました。

山下：それでは、先生の強みの英語とは？

A：英語とは、長くかけ離れていました。1980（昭和55）年卒業ですが、1994（平成6）年まで、ぜんぜん英語とは触れなかつ

た。ただ、1年生を担任しているとき、1時間だけ中学校に英語を教えに行くというのはありましたが、自分の担任をしている子どもを他人に任せてまで、中学校に行くというシステムがない中で交流はどうかと思っていました。

山下：N町は、ALTを早くから招聘していましたね。

A：ALTがいたのは、当時の町長さんが、連れて来られたのです。町長さんは、「100年先を見なさい」とよく言っておられました。町長さんは、外国の人の1本の金色の髪の毛を大事に持っている小学生を見て、これからの子どもたちは外国の人と触れ合いたいと思っているし、英語が必要だと思われたということでALTを招聘されました。

山下：この時期は年齢から言うと、子育てがたいへんでしたでしょうね。

A：はい。子どもが3人おりました。新聞の取材をしている記者の奥様が子どもたちを見てくださっていました。母も仕事をしていたので、三段構えということでやっておりました。子どもをほったらかしておりました。すごござっばらんな方で「3人子どもを産んだんを覚えとん？」と言われながらでした。青空幼稚園みたいに近所の子と見てくださいました。（笑）ほんとうに人に恵まれていたということが一番ですね。

【考察】

教員になっての初年度において、いかに同僚との関係づくりが大切かということである。

その後、1年担任、2年担任、3年担任、4年担任を受け持ち、子どもの発達段階に合わせた指導のあり方を先輩から丁寧に学んだ。また、1年担任、3年担任、5年担任、6年担任をすることで、授業や学級生活の中で一人一人が活躍することを重視し、子どもの生活に合わせて動く環境作りに努めた。子ども一人一人が

活躍する学級経営の構築の仕方を学んだのである。

同時に、自治体の教科研修会では、算数、国語、生活、図工、音楽部会など様々な部会に属し、進んで研究授業をすることで小学校の教科指導の力を形成していった。

また、ALTがいることで、高学年では週1回、1～4年生では月1回英語に触れる機会をもち、ALTに対する子どもの反応を観察していた。小学校の英語教育のあり方を模索し始める期間になった。

プライベートは、赴任して2年目に、町役場に勤務する伴侶に出会い、結婚した。子どもを3人出産して、合計1年7ヶ月の育児休暇を取得した。徐々に多忙になっていくが、家族や近所の人に助けられ、仕事との両立を果たすことができ、公私ともに充実していた。

子どもたちの6年間に関わる小学校教員として、教員としてなすべき基礎基本をじっくりと身に付けることができた。

③ 第3期 小学校英語活動実践研究(1994～1996)

いよいよ、1994(平成6)年、文部省指定研究開発学校として、小学校における英語教育に取り組むことになる。小学校における英語活動のあり方を研究し始めた。当時の校長から、締め切りの迫る研究開発の話を持ち掛けられた。現在、校長職の2人の先生方と、独創的なことをしたいということで意気投合した。他の教科等と違って、英語はまだ研究において開拓されていないところがあり、研究の余地があると見解が一致し、引き受けることに賛同したのだ。

目標にしたことは、研究主任としてカリキュラムの作成である。へき地学校としての課題「表現力育成」の一助となるカリキュラムとして、体験を通して、自ら働きかける積極的な態度をねらいとした。赴任して、N小の子どもたちの実態を変えていきたいと強く思うようになったことが原動力となっていった。このことを教員Aはこう語っている。

A : ここに来て、この島の企業に就職するときに、他の地域から応募して来た人たちと並ぶとN町の子どもたちは、もう何にもしゃべれない、インタビューを受けても何もしゃべれないということを知りました。島出身であることを恥ずかしいように思っていて、バスが通っていない、電車が通っていない、コンビニはないだろう、そういうへき地であることを子どもたちは隠すという感じであったんですね。

それはそうじゃないだろう、もっと誇れる、「この島出身や！」と胸張って言えるような、そういう意識を育てないといけないと一番に思ったのです。英語も一つですが、外国の人に会ったときに、しゃべれないからというのではなく、おどおどするのではなく、堂々としていることができる人になってもらいたいという気持ちがあって、「外国の人がいることなんて普通やったし！」という環境をつくりたかった。英語を切り口にして、子どもの引っ込み思案を変えていく、「負けていないよ！」というものをづくりたかったんです。

山下: それは、いつ頃からですか。

A : だんだん思うようになってきました。

山下: 高校に進学するとそんなことが起こりますね。

A : 高校に行くと、島出身ということで小さくなっていました。中学校でも同じで、卓球の試合に行くと、K郡には4校しかないのですが、消化試合のようで。「N中の子には負けん」と言われて、「くそっ、今に見ておれ」という気持ちでした。子どもたちにはそう思っただけだと思いません。3年ぐらいして、男女共に優勝しましたけれどね。

山下: すごいですね。すぐれた人はいろいろと力をもっていっぱいますね。

A : 小さくならんでいいんやで、ということですね。英語も一つということですよ。

A : ここに赴任した教員は3年で変わって

きます。転勤して来られた先生は、転勤前の学校でやってきたことを持ち込んできます。目の前の子どもがこうだから、というのではなく、前はこうだったからというのは、ちょっとかちんとくるんですよ。自分が若いときは、その繰り返しでした。転勤してくる先生方が比較論で、教育を語るんですね。前の子どもはこうだった。N小は、それに比べると～だと。N小の子どもは、これができていない、という路線から入ってくることは、「ちょっと違うだろう」、「他にはないよさがきつとあるだろう」、「子どもたちは、そんなに劣ることはないだろう」、「人間として変わることはないだろう」と思うので、否定から入ることに反発はありましたね。うちの学校には、うちの学校としてのやり方があるだろうということ。人が変わったら考え方がどんどん変わっていく、学校らしさというものがないことがいやだったんです。何か一つ続けていくことがあることが、子どもにも先生方にも必要だと思ったのです。

【考察】

子どもたちを思う気持ちは、これからの教員Aの教育実践をしっかりと支え続ける。教職の使命である、子どもを育てるという責任感がうかがえる。

その後、6年担任、新採担当（4年補助）、1年担任として実践しながら発達段階に合った英語活動を生み出そうと研究がスタートした。

初めは、自分の学んだ中学校時代の英語教育を再現していた。しかし、「何かが、違う」と問いつつ模索した。そうすることで、自分が経験した中学校での英語学習ではなく、子どもの特性を生かす英語活動が求められることに気付いた。中学校との連携は全く考えず、目の前の子どもの特性を生かし、「下から英語教育を変える」という考えに至ったそうだ。専門職としての意識の高揚の現れである。

④ 第4期 中学校英語科実践研究（1997～2001）

N小に17年間勤務し、研究も終わったとき、校長から中学校赴任の打診を受けた。

A : 校長から「中学校に行けば」と言われて、そんな選択肢もあるのかと思いました。転勤希望を出したこともありますが、県教育センターに行きたいと言うと、当時の教育長さんから「人に教えてあげないかん年になって、何を教えてもらうんや」と言われたし、そのころ、どこへ行ってもたいへんだと思ったので、同じ頑張るなら、N町の子どものためにと思ったのです。

1997（平成9）年、隣接するN中学校に異動する。中学校の教科として、本格的に英語の指導方法を学ぶ。中1～中3を5年間指導する。「聞くこと」「話すこと」を多く取り入れるために少人数指導体制づくり、ペアやグループ学習が容易に行える学習環境作り、教材開発等に力を入れる。

この頃、小学校では、各都道府県に1校ずつ、英語活動の研究指定が行われる。教員Aは、小学校で英語に触れる体験をしてきた生徒の実態調査から、小・中連携の必要性を痛感しながら、小学校でのこれまでの取組をまとめ、文部科学省研究開発連絡会で、全国の実践校にこれまでの実践を発表する。さらに、研究実践が大手の出版会社の書籍に掲載される。

【考察】

中学校に異動となって、本格的に英語教育に力を入れることになった。そのことが専門職としての高度な知識や技術を日々の実践の中で積み上げることになり、いっそう専門性を高めていくことに繋がった。

⑤ 第5期 小中連携英語教育（2002～2007）

中学校教員として小学校6年生を指導しながら、英語教育における小・中連携の研究を始める。文部科学省指定研究開発学校として、一部に5・4制を取り入れた小・中連携教育の研究

である。

実際に、小6～中3までの指導を行う中で、小学校高学年の英語活動のあり方を模索した。

A : 中学校に赴任したとき、もうすでに英語をシャットダウンしている子どもがいました。また、1年生は、多くが「英会話をしよう」というのだけれど、こつこつ勉強するということが苦手でした。小学校低学年で英語に親しんでいた子ども達が中学校に入ってきてどう伸びているかと期待したけど、思ったようには伸びていると思えませんでした。小中連携の必要性を感じました。低学年でやっていたことが、そのまま定着していくのは難しいと思いました。

山下：早い気付きですね。

A : 今からやっていく人たちは、多かれ少なかれ同じ道を辿ると思うのですよ。

平成14年に、5・4制の小中連携の研究を受けるということになりました。小学校5年生と小学校6年生の区切りは体の成長上からもあると思っていました。また、研究していたときより、時間が経っていたので、ALTから、小学校6年生の授業が成立しにくいことも聞いていました。

これらの課題を克服するために、新たな研究開発が行われたのです。小学校6年生が、中学校へ行って、その英語教室で、中学校の先生が英語を教えるということを始めました。英語だけではなく、体育、音楽、美術も中学校の教師が教えるということにしました。子どもの数が減り、専科の先生の数も減っていきます。それでは、教科の専門性がなくなりますよね。そこで、小学生も教えるということで、教員数や専門性を維持できるのではないかと考えました。

この体制で小6の学習意欲は上がりました。それでも、英語の力が十分ついたかという、まだまだ課題があります。そこで、今回の研究開発を受け、教科としての小中の連携を目指しています。今は、小学

校6年生と5年生が、週2時間学習しています。

実際に、昨年度から、外国語活動が始まりましたね。T市の先生方の授業を見せていただきました。すると、やっぱり自分の中学生時代の教え方、私たちが平成6年度に教え始めた方法と同じことをしてしまうんですね。でも、それも仕方ないですよ。きちんとしたカリキュラムがないところでのスタートですから。

平成6年のときに、全部の学習指導案集を作りました。これは当時のK校長先生が、「全学年35時間の指導案を作る」とおっしゃいました。私と同僚の先生は「できないでしょう」と言いましたが、K校長は、「いや、それがないと続かない」と言われました。そこで、みんな必死で作りました。それが、『イエローブック』という指導案集です。それがあつたから、転勤してきた先生も、中学校へ行った私も、この指導案集を核としてやって行けたんです。そして、平成14年にもう一度研究開発を受けたときに、指導案集を作り直しました。今回の研究開発では、評価をもうちょっと考えて指導案を考え直す、という課題を持っています。子どもたちを実験台にするのではなく、10年先を見越して、続けていける指導案を考えることが、研究開発を通して私がやりたいことです。学習指導案があれば、続くと思うのです。中学校の方も英語科担当の先生が単元集という形で作ろうとしています。これは研究のチャンスを生かさないと、学校の予算では難しいことなので。

山下：初任者に語ってほしいお話ですね。

A : 教員研修が大事だと思います。子どもにとって、やはり、教員が大事なのですよ。子ども達は教員次第で、なるようになると思います。だから、来年度は研修を充実していきたいです。今年は国語の校内研究授業もやっていて、とても勉強になりました。同じ「言葉の教育」ですから。平成

24年度は、研究発表会もあるので、定着できるようにしていきたいです。

【考察】

小学校6年生の英語学習に「中学校単元との連携、音声と関連した文字指導、活動から学習としての体制づくり」を取り入れて年間70時間のカリキュラムを作成した。楽しみながらも定着を求めることで、子どもの学習意欲は一時下がるけれど、次第に回復し、できるという自信になることを実感する。

何が子どもたちの成長に求められるのかを考え、日常の地道な作業の積み重ねをおろそかにしないところが教育の目的のぶれを起こさないと言えるであろう。

2005（平成17）年から2008（平成19）年福武文化財団助成による「英語教育の幼・小・中連携」に取り組み、幼・小・中連携の英語教育のカリキュラムや、11年前に作成した『イエローブック』という小学校の指導案集の改良に着手し、新たに『English Teaching Plan 2007』を作成した。資料①から分かるように、指導の明瞭さを出し、さらに実践的なものになるようにねらっている。333頁というページ数からもうかがえるように、きめ細かい指導案集に仕上げられている。このような大作ができるのは、日々の着実な実践がなされているからこそである。

この間、ALTとの交流も密に行い、ぬいぐるみを留学生と見立てて実際に渡航させて情報交換する「ドラえもん留学プロジェクト」（資料②参照）の立案実行を手がけた。子どもたちの側に立った柔軟な発想であった。教員Aは、次のように語っている。

A : スコットランドから来ていたALTが再来日した去年、お子さんを連れてきましたね。帰るときに、ぬいぐるみのドラえもんを留学生として出しました。すると、ぬいぐるみだけれど、その学校でいろんな体験をして写真などを撮り、記録を残してくれました。帰国のときに、留学生のぬいぐるみを連れて帰ってきました。今、ちょ

うど、小学校に、UKのネッシー“ハピネスくん”がいます。ドラえもんの体験記の英語を中学生が読んで、朝の時間に小学生に話してもらいました。今、ハピネスくんは、給食を一緒に食べているところや習字の時間のところで一緒に写真を撮り、それができれば、中学生が英語で説明を書き、送るというプロジェクトをしています。子どもたちには、実際に相手がいることを想定し、英語で書くことができる効果があります。このドラえもんも今回で5回の渡航をしています。スコットランド、UK、アメリカ、中国、そして、今回。ちゃんと、パスポートも持っています。行った学校のスタンプを押してもらうのですよ。今回は、スコットランドなので、キルトをはいて帰るのですよ。今度は、着物を着せて行く予定です。笑)

このプロジェクトでアメリカのボーマンスクールに行かせたときは、実際の交流にまで発展しました。その学校の生徒19人が来日したのです。この企画は、現地の日本人の先生と仲良くなり、いろいろな交流をしていたので実現したものです。中3がちょうど19人いましたので、1対1で交流しました。平成19年度だったと思います。来日することが決まってから来日までに、一人一人が文通をしていました。

【考察】

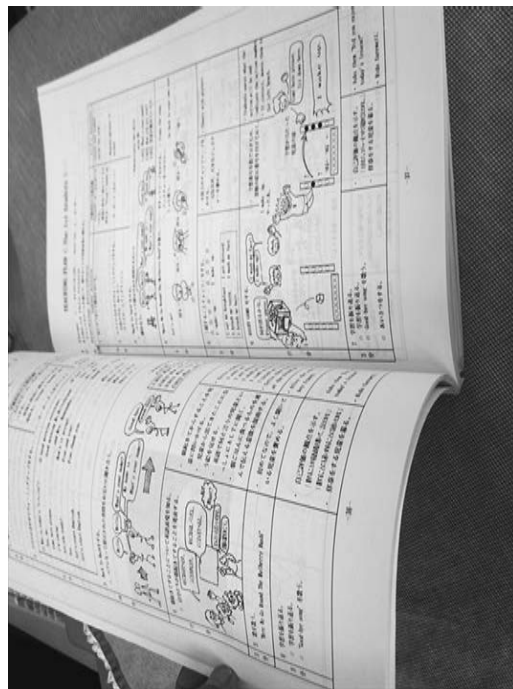
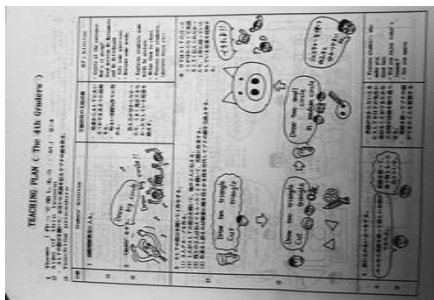
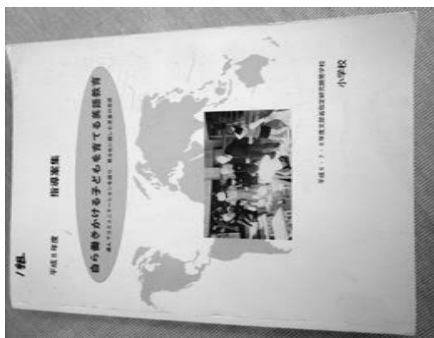
教員Aは、1994（平成6）年、文部省指定研究開発学校として、小学校における英語教育に取り組むことになったときに、ALTとの会話がスムーズにいくように英語の猛勉強をしたそう。ALTと会話が進み、共感や信頼を得ることで、交流が深まっていった。そこから生まれたこの開発プロジェクトは子どもたちの前向きに英語を学ぶ意欲とスキルをいっそう高めた。

たいへんなことだが、求められる力に自ら磨きをかけて、想像力と創造力の集結による発想を伴いながら新しい展開を起こすことで、子ど

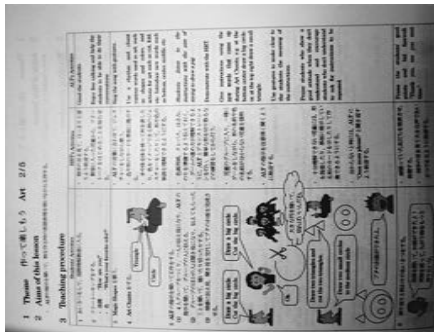
資料①

指導案集の改革

『イエローブック』（平成8年度 指導案集）



『English Teaching Plan 2007』（平成19年度 指導案集）



もたちと共に楽しみながら英語教育を補強・拡充していく力を発揮していった。

資料②



⑥ 第6期 教員研修の充実 (2008～2010)

2008(平成20)年、再び、N小学校に異動する。児童のコミュニケーション能力育成には教員の指導力向上を急務とし、英語教育の体制向上、教員研修の充実、環境整備などに取り組む。自校の現職教育の充実を図り、REACT (Really Easy Azalean Chatterbox Time) という教員自主研修を立ち上げる。

全学年の全単元におけるレビューシート、リフレクションシートを編成し、学習内容を視覚化することにも取り組む。

県内外からのALTを招待して、英語を使った活動を行い、一般の先生方にも一日学校を公開する「Meet the World」、「英語集会」、「ワールドクラブ」など、英語を実践的に使う場の拡大を積極的に図る。この間、独自のCD教材を作って全校共通の「English Time」(資料③参照)で活用したり、毎日の校内放送で英語の歌を流したりして、楽しく無理なく英語をすり込んでいった。授業と授業を繋ぎ、語彙を増やす成果を出した。

また、K県内で外国語活動の研究組織が立ち上がったことから、所属するT支部外国語活動部会の研究主任となり、他校での指導力向上のための指導にも尽力する。県内の学校などの研修指導や研修会での実践発表等に出ることも多く、平成24年度の夏季休業中には8回出席す

る。

次のような経緯から、日常的に実践の場を公開し、授業視察等も積極的に受け入れている。

A : 1994(平成6)年に、東京の先進視察校に行きました。その先生が私を連れて、3時間も4時間も見せてくれました。その経験から、私も誰かが授業を見せてほしいと言うと、「いつでもどうぞ見てください」と公開してきました。

【考察】

教員Aは、自身の力が安定し充実してくると、後進の力量形成の重要性に気付き、後進の育成に力が入ってきた。相乗効果としてさらに、自身の専門性に磨きをかけ続けている。日々の授業を制限なく公開することができるということは、一時間一時間の授業をいかに大切にしているかということと、いかに自信があるかということである。環境整備にもいっそう励み、学校独自の教材づくりにも手腕を発揮している。これらのことを通しての同僚との関わりを見ると、人間としての幅を感じ、総合的人間力を兼ね備えてきていることがうかがえる。

⑦ 第7期 教科化の研究 (2011～2013)

2011(平成23)年、5・6年生に週1時間、外国語活動が本格的に始まる。同時に文部科学省指定研究開発学校として、外国語の小・中連携の研究に取り組むことになる。

小学校における英語学習の教科化により、英語によるコミュニケーション能力の実質的な向上を目指してカリキュラム作成に取り組む。

5年生の外国語活動の時間を週2時間指導しながら、5年生の単元開発に取り組む。同時に、研究主任としてカリキュラム全体の考察に取り組む。音声と文字をつなぐ指導を研究する(資料④)。

教員同士が協力し、自信をもって指導できるよう、いろいろな研修の場を設定するように心掛ける。

English Time の取り組み

English Timeの取り組みもできよう...

「英語活動」の取り組み



1 これまでの取り組み

平成21年度 みんなで取り組んだ体制作りの年

CDと教材を配布して、同じように指導する

月	題材	語彙	表現	歌	コミュニケーション
4月	好きなもの	色、果物、野菜	What ... do you like?	Animal Chant	eye contact smile
5月	好きなもの	食べ物、スポーツ	What ... do you like?	What's this?	clear voice
6月	これは何でしょう	動物	What's this?		willingness
7月	英語集金に向けて			Open your Heart School Song	from your heart
9月	これは...です	自分のもの、かさく	This is ...		willingness

平成22年度 教材を活用して English Time の「ターニング」を増やした年

音声・映像教材（英語ノート音声教材、電子教材、「ワイズでチャッツ」など）の活用
LIVE放送、友達とのチャット

月	題材	語彙・表現	歌
4月	あいさつ ：場面ごとのあいさつ ：世界のあいさつ	Hello. My name is ... Nice to meet you. ナマステ、ニイハオ...	Hello from the World
5月	動詞	Touch ... Get up ... など	
6月	数字	1-100 ：目上算クイズ ：世界の言葉で数えるじゃんけん	Ten Steps One, Two, Three Smile and Say Hello
7月	英語集金に向けて		
9月	クイズチャッツ	色、動物、鳴き声、算数 など	

【6月の活動例】

10 水	1 How many ... ? 5枚 2 How many ... ? 5枚 3 How many ... ? 5枚
11 金	1 How many ... ? 5枚 2 How many ... ? 5枚 3 How many ... ? 5枚
12 土	1 How many ... ? 5枚 2 How many ... ? 5枚 3 How many ... ? 5枚
13 日	1 How many ... ? 5枚 2 How many ... ? 5枚 3 How many ... ? 5枚
14 月	1 How many ... ? 5枚 2 How many ... ? 5枚 3 How many ... ? 5枚
15 火	1 How many ... ? 5枚 2 How many ... ? 5枚 3 How many ... ? 5枚
16 水	1 How many ... ? 5枚 2 How many ... ? 5枚 3 How many ... ? 5枚
17 木	1 How many ... ? 5枚 2 How many ... ? 5枚 3 How many ... ? 5枚
18 金	1 How many ... ? 5枚 2 How many ... ? 5枚 3 How many ... ? 5枚
19 土	1 How many ... ? 5枚 2 How many ... ? 5枚 3 How many ... ? 5枚
20 日	1 How many ... ? 5枚 2 How many ... ? 5枚 3 How many ... ? 5枚
21 月	1 How many ... ? 5枚 2 How many ... ? 5枚 3 How many ... ? 5枚
22 火	1 How many ... ? 5枚 2 How many ... ? 5枚 3 How many ... ? 5枚
23 水	1 How many ... ? 5枚 2 How many ... ? 5枚 3 How many ... ? 5枚



【チャット活動をしている6年生】

平成23年度 身近な英語の読書を増やすために Picture Dictionary を取り入れた年 （9月の1・2年と3～6年の計画例）

日	活	動	備	考
1	1. English Time 2. What's your name? 3. What's your color? 4. What's your favorite food? 5. What's your favorite animal? 6. What's your favorite sport? 7. What's your favorite season? 8. What's your favorite color? 9. What's your favorite fruit? 10. What's your favorite drink?	1. English Time 2. What's your name? 3. What's your color? 4. What's your favorite food? 5. What's your favorite animal? 6. What's your favorite sport? 7. What's your favorite season? 8. What's your favorite color? 9. What's your favorite fruit? 10. What's your favorite drink?	1 2 3 4 5 6 7 8 9 10	1 2 3 4 5

1・2年用に、Young Picture Dictionaryを、
3～6年用に、Picture Dictionaryをそろえました。

【英語を聞いてその絵を指さす活動】

平成24年度 これまでの教材を活用して、月ごとにテーマを決めて担任の読書を増やした年 【年間の計画】

活動内容	実施月
1 Picture Dictionary（1年は自作CD）を使って、読書を増やす。	5月・9月・11月・2月
2 一斉放送（テレビ）で、Hi, friends!の電子教材を使って活動する。	4月・6月・10月
3 CDを使って、集会やMeet the Worldに向けて歌の練習をする。	7月・11月・12月
4 Can-Do リストを使って、できることを友達と確かめ合う。	3月

2 これまでの実践をもとにした来年度の計画

5分間と短い時間ではあるが、継続することで、児童が「知っている！」と思える語彙が増えました。特に、英語活動や外国語で学習していることと、English Time での内容が重なるほど、授業中における児童の英語が多くなる。
各学級では、English Timeに慣れ、児童がCDを用意したり、CDの流れに頼らず、CDを止めて、児童の様子を見ながら難しいところを繰り返したり、その学年に合った活動を入れたりして工夫している。




【平成25年度は・・・】

これまでの教材を整理して、英語活動・外国語の学習内容に関連した語彙を扱っていくように、学年別年間計画を作成して実施する予定です。

資料④

外国語の「前期」と「後期」をむらむらに接続

	【授業時間数】	【指導者】	【教室】
外 国 語	9年(中3) 160時間/年	中学校 外国語専科 (ALT)	
	8年(中2) 160時間/年		
	7年(中1) 160時間/年		
英 語	6年 70時間/年	中学校 外国語専科 ALT 学級担任	中学校英語教室
	5年 70時間/年	小学校 外国語専科 ALT 学級担任	
	4年 35時間/年		
	3年 35時間/年		
	英 語 活 動	2年 35時間/年	学級担任 ALT
1年 34時間/年			

2012(平成12)年11月2日に、文部科学省指定研究開発学校2年次研究発表会を第3回中国・四国地区へき地教育研究大会と合わせて行う。そこでは、自ら公開授業や全体提案を行った。

公開授業や全学年の公開活動で、子どもたちの英語を通してコミュニケーションをしようとする力や英語運用能力の高さを見ることができた。さらに、今年度自校で実施した実態調査や昨年度実施した「児童英語検定BRONZE, SILVER」「県学習状況調査」などの学力検査による客観的調査の結果を見ると、確かな伸びが確認されている。中学生の「中学校での英語の勉強がやりやすく、話すのが困らない」というコメントにもあるように、積み上げの効果が現れている。やはり英語学習独特の難しさに課題は残ってはいるが、どの客観的調査においても、平均値を上回り、特に「表現」に関する問題の正答率が高い。子どもたちの実態に日々向き合った成果である。

山下：子どもたちはずいぶん力が付いてきていますね。公開授業を拝見させていただき感じました。授業が始まる前の5分間の「English Time」の取り組みには目を見張るものがありました。

A：小学校の英語学習は授業時数が中学校に比べて少なく、発達段階からも授業以外のところで毎日少しでも耳にすることが記憶に繋がると考えます。授業と授業を繋ぐと

いう意味で、給食時に英語の歌を流し、5時間目の5分間で「English Time」をしています。

「English Time」は、教員にとっても研修の場と捉えています。CDに沿って実施するとは言え、ALTなしで指導する唯一の時間だからです。時間を確保し、教材を準備すると、先生方はきちんと実施してくれます。5分でも、継続すれば子どもにとっても教員にとっても大きな力になっていくと思います。

山下：隙間の時間を効率よく活用し、全教員が子どもたちと楽しく取り組めるように仕組みられていますね。見事です。

今回の研究はこれまでの集大成ですね。

A：そうです。英語教育に力を入れつつ、ふるさと学習、いわゆる「地域発信型単元」を定着させ、子どもたちの自尊心をいっそう高めることにも取り組んでいます。総合的な学習の時間や生活科、社会科など、他教科の学習内容を生かしながら、自分たちのことや地域のことを英語で発信することを通して、自尊心を高めたり地域への愛着を深めたりすることに繋がりたいと考えているのです。

山下：A先生の当初の願いがずっと繋がっていますね。高いところまで到達してきていますが、課題は何ですか。

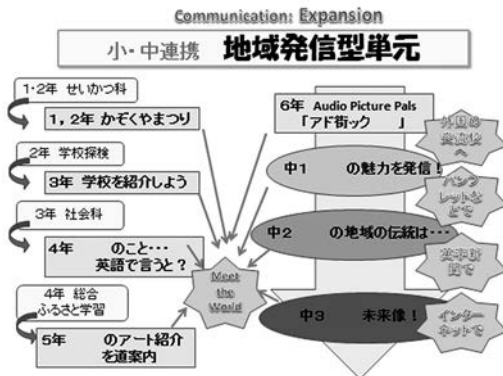
A：次年度がこの開発の仕上げの年です。これまでの取り組みをうまく繋ぎ、子どもたちの力が高まっていくように、教科として取り組んでいる成果を出したいです。中学校で英語教育を始めていたときに、夏頃に意欲も学力も落ち込む現象があったのですが、教科化になってそれが小学校の高学年で現れています。それを克服していけるようにしたい。そのためにも評価のあり方を考えていきたいと思っています。

【考察】

資料⑤に表されているように、小中が一貫したカリキュラムが構築された。また、資料③の

「English Time」の変遷を見て分かるように、達成しても、そこで踏みとどまらず、次の課題を見極め前進しようとする一途さに努力を惜しまない教員のもつべきプライドをまぶしいくらい感じた。

資料⑤



3 教員Aの職能発達の特質からの考察

教員Aのライフヒストリー分析から示唆されることは、大きく2点ある。

1点目は、教員の職能発達において、省察が重要であるということだ。目の前の子どもの姿や実態から目を離さず、日々の実践の積み上げをすることが大前提として求められる。教員Aは、着任してから様々な自らの実践を振り返る機会があった。しかも、自身の取得した教員免許の専門教科と合致したことは好機であった。文部科学省指定研究開発学校としての研究を重ねてきたことや小中の2校種間を行き来したことにより、その都度、自身の創意を表出することや質的変容を求め、歩みを止めないところが職能発達と繋がった。

2点目は、同僚の教員との協働意識をもつての連携・協同である。指定研究開発学校を受けるとき、研究が進むにつれ、単元や指導案作成、教材開発やカリキュラム開発など、また、校内外での教員研修を行うときなどの同僚教員との関わりやその存在は、教員Aの職能を発達させていく上で重要な役割を果たしたと言え

る。

教員Aの職能発達を時系列で見てきたが、これからの教員に求められる資質能力と言われる①教職に対する責任感、探究力、教職生活全体を通じて自主的に学び続ける力、②専門職としての高度な知識・技能、③総合的人間力、この3つの力を教員Aは育んできたことが分かった。教員Aは、英語教育を通して子どもたちの健全な成長を求める中で、結果として「学び続ける教員」として成長してきたことが確認できた。

4 今後の課題

教員Aのライフヒストリー分析より、その思考や行為を内面から描き出すことで教員の職能発達の質的把握は可能となった。今後さらに、実践力のある複数の教員のライフヒストリー分析を行ったり、質問紙による量的把握をしたりすることで教員の職能発達のための方策を探っていきたい。

【謝辞】

秀逸な研究実績をもつ教員Aのライフヒストリー分析に携われることは光栄です。けっして高ぶらず、目の前の子どもの成長を強く願い、着実に日常実践を積み上げ、研究推進を先導するところは、教員としてたいへん魅力的です。本研究に協力していただきました教員A並びにN小学校の関係者の方々に改めて感謝をいたします。

〈引用文献等〉

- 1) 山崎準二著(2002)『教師のライフコース研究』創風社 69頁
- 2) 平成24年8月28日中央教育審議会答申「教職生活の全体を通じた教員の資質能力の総合的な向上方策について」
- 3) 小学校における外国語活動を円滑に実施運営するため、各小学校において中核となって外国語活動を推進する教員に対し、校内研修の意義や役割、校内研修運営方法、学級担任の役割、教材作成の

方法等について継続的な研修を実施し、小学校外国語活動の基本理念等を理解するとともに必要な知識を習得させ、指導力の向上及び必要な英語運用能力の向上を図ることがねらいである。平成20年・21年の2年間をかけて、各自治体で3～5日かけて集中的に研修が行われた。